

# ハレバレモンスターSTORY

## 第1章

### 第3話 夢物語

ハレバレタウンにあるアカナツ学園。

夏休みに入ったというのに補習に来させられているリィ。

そしてもう一人、空想好きでおしゃべりな少女ハルネ。

「リィ、終わった？」

『もう終わるー』

「裏切り者お」

『何だよ』

「はああああなんで夏休みなのに学校来てんの？夏”休み”じゃないの？こんな詐欺じゃん！休み休み詐欺！！」

『まあまあ補習も今日で終わり、あとは満喫するだけっ。しかも！私読書感想文すでに終わってるし。』

「なにそれ！？リィが？完全な裏切り行為、ああ～仲間だと思ってたのに、心の友だと思ってたのに、ああハルネは傷つきました～」

『おおげさあ、休み前にテツくんが手伝ってくれたんだ。』

「まじ？こうなったらさ、みんな呼んで分担すれば早く終わるんじゃない。」

『それいいかも！さすがハルネ！』

「えっ？ホントに？ただの思いつきだよ？」

『めっちゃいいって、この前ホーミンにも宿題見てもらったんだけど、教え方うまくてあっという間に終わったし』

「じゃあ声かけはリィに任せる。アタシ人望ないし。」

『そんなことなくない？ハルネのこと好きな人、いっぱいいるよ』

「またまたあアタシみたいなバカの言うことなんて誰も真面目に受け取らないよ。」

『そう？でも私はハルネのバカみたいな思いつき好きだよ。』

「リィがちょっと変わってるの。さっ、か～えろ」

『・・・ねえどっか寄らない？』

『やっば————い！！、日差しつよっ！』

「リィがアタシの好きな場所って言ったんだからね。」

『ハルネって海好きだったんだ』

「・・・昔海見ながらさ、空想であんなことしてみたいとか、こんなこと出来たらとか、そんなことばっか考えてる時があってさ。それ以来かな。

でもアタシ、バカだからさ。叶えられる頭も知識もないし、夢物語見たいな空想をまともに相手してくれるヤツもいなかった」

『よかった。』

「えっ？」

『だってもし相手してくれる人がいたらハルネの事取られちゃってたかもしれないもん。ハルネが思いついたことやってみたいこと、私も一緒にやってみたい』

「なに言ってんの？」

『言ったでしょ、ハルネのバカみたいな思いつき好きだって。』

「なにそれ・・・」

『夢物語 一緒にやる』

茹だるような暑さの中、彼女は目を輝かせてアタシを見る。

差し出された手をアタシは掴む。

お互い汗で濡れているのはずなのに不快感は感じなかった。

「アタシさ、この夏やってみたいことがあるんだよねえ」

『なにになに！？さっそくじゃん』

「実はね——

ずっと忘れていた何かが心の奥で温かく灯った気がした。